

令和6年度士別市総合教育会議（第1回） 会議録

- 1 日 時 令和6年6月10日（月） 午後3時00分～4時30分
- 2 場 所 士別市役所2階 庁議・来賓室
- 3 出席者 **【構成員】** 渡辺市長、泉山教育長、馬場教育長職務代理者、加藤教育委員、
山田教育委員、多田教育委員
【事務局】 教育委員会 三上生涯学習部長、
岡田学校教育課長、千葉社会教育課長、
徳竹合宿の里・スポーツ推進課長
総 務 部 大橋総務部長
- 4 報 道 3名（北海道新聞、道北日報社、北都新聞社）
- 5 次 第
 - 1 開会
 - 2 あいさつ
 - 3 協議事項
 - （1）令和6年度士別市教育推進の重点について
 - （2）中学校教科用図書の採択について
 - （3）士別市小中学校適正配置計画について
 - （4）中学校部活動のあり方について
 - （5）各種スポーツイベントの開催について
 - 4 その他
 - 5 閉会

1 開会

○三上生涯学習部長

はじめに、渡辺市長からご挨拶いただき、その後、議長として進行願う。

2 あいさつ

○渡辺市長

日頃より教育委員として、士別の教育行政に対して、ご意見等をいただいていることに感謝申し上げます。夏本番を迎えるが、6月15日から23日までは「スポーツウィーク」で、今年

は春の暖かい時期の実施とし、社会福祉協議会をはじめ多くの団体の協力をいただき、1週間にわたり市内各地で様々な催しを行う。7月には「ホクレンディスタンスチャレンジ」「士別ハーフマラソン」があり、委員の皆さまのお力添えをいただきたい。また、7月23日から26日の日程でみよし市からの受入をする。

本日は、士別市小中学校適正配置計画、特に朝日地区、温根別地区に関する情報と、教科書、今年度の教育推進の重点について説明する。あわせて中学校の部活動のあり方や地域移行についてもご意見をいただきたい。

3 協議事項

○渡辺市長

(1)「令和5年度士別市教育推進の重点」について、説明を願う。

○三上部長

令和6年度士別市教育推進の重点について、資料4ページ、令和6年度2024年度士別市教育推進の重点を今年度も作成している。今年は、全体のキーワードとなる言葉が、「ウェルビーイング」で、心身の健康、この言葉については、昨年6月に閣議決定され、新たな教育振興基本計画の中で入っているワードとなっている。これまでも、教育だけではなく、市長のお話の中にもこのウェルビーイングという言葉は度々入っている。もう1点は「子ども理解の感度を高める学校運営と学級作りのもと」ということで、泉山教育長が昨年に関任され、この教育の重点に携わっていただいた。4月から教育委員会の様々な、校長会を始めとする会議の中で、「感度を高める」といったキーワードを使っている。我々職員としても、様々な感度を高め、アンテナを張って情報を収集するといったところも含めて、そこを教育の重点のまず初めという部分で記載をさせていただいている。

この教育の重点は、昨年度同様に、1点目に学校教育、2点目に社会教育、3点目にスポーツの振興、4点目に文化芸術の振興、そして最後となる5点目に教育の学習環境の整備という構成になっている。

この部分については、教育長の士別まなびフォーカスから、あと各担当課の方から、それぞれの資料を使って説明をさせていただきたいと思うので、よろしくお願いします。

○泉山教育長

士別まなびフォーカスについて説明する。これは、執行方針の概略をかいつまんで、主に学校教育を中心とした1枚ものになっている。上川教育局が成している「上川まなびフォーカス」を基に、本市の視点で作ったもので、まず1番上は、令和の日本型学校教育の構築、これについて国は色々な施策をとっている。個別最適、協働的等、これを受けて、道の基本理念である3本の施策の柱と、22の施策の中の黄色で示したものが「上川まなびフォーカス」で、上川管内で特に力を入れていこうという4つである。各教科の資質・能力を高める。それに対してはICTを活用しながら個別最適・協働的な学びをしよう。そして、不登校児童生徒への支援、学校と地域の連携・協働と、これが上川管内全部の学校で市町村でやっていこうというもの。ここでは学校教育、子ども、児童生徒に特化しているが、世代を超えた市民全部のウェ

ルビーニング、こういった視点で考えていくことが大切となる。

中ほどには、本市で特に力を入れていくスポットで、7つ示した。子どもは1時間授業する中で、できたとか、わかったとか、やるぞとか、こういう姿、表情を見取って育む。教師が見取るとは、子ども理解を高めていく必要があることから、感度という言葉も入れた。

1つ目は、働き方改革を含めて、先生方のもやりがいをもって教壇に立つことができる。2つ目は、これは本市の強みで、実は翔雲高校も来年度からコミュニティスクールに向けて動いているが、現在、東高校を含めて11校がCSと地域学校協働活動を行っている。いじめ、不登校については、困った時に相談できる体制、援助希求的態度、生徒指導の中でこれを育んでいく。本市の独特な教育活動、農業学習。今まさにアスリートが来ているが、本物を学ぶ、そういった体験的な活動。これは小中高のキャリア教育に繋がっていく。それから、特別支援教育、健康指導、感染症対策の充実、更に生きる力の基盤となる健やかな体の育成では、小学校と中学校に体育科の加配教員を置いており、全道に10数人しかいないが、本市には小・中学校で2人いただいている。スポーツ活動、体力向上も工夫していく。そういった7つの視点というところで、力を入れてやっていこうということを教育推進会議の中で各学校と確認した。

これを受けて、各学校では教育課程を編成し、例えば、全国学力・学習状況調査や運動能力テスト、そういった客観的データに基づきながら、分析に基づきながら指導の改善をしていく。それに合った、実態に沿った指導の改善を行っていく。それから、今、小中の連携だとか一貫が叫ばれている中で、滑らかな接続と、幼稚園、保育園も含めた小学校との連携ということも大事だと思っている。そして、1番下には、各教科等の学習で留意したい内容となる。

○岡田課長

学校教育課から、令和6年度実施予定している具体的な事業について、教頭住宅屋根塗装工事、校内ネットワーク整備、大型モニター更新、校務支援システム更新を予定している。次に、学校教育課の当面の課題といたしまして、ICT教育の推進については通信環境の整備を予定しており、家庭の状況確認や、持ち帰り活用に検討していく。次に、各種検定料助成については、昨年度から図書カードの配布としているが、オンライン手続きを活用して口座振替に戻すことも検討している。がん教育、薬物乱用、性教育については、児童生徒に対し各種情報提供を継続し、外部講師を活用した事業の実施についても検討していく。1日防災学校については、昨年度、土別南小学校、上土別小学校、多寄小学校、温根別小学校、上土別中学校の5校で実施、まだ実施していない学校を優先して実施していきたい。ALTの配置では、これまで指導されていたサムさんが7月で任期満了を迎えるため、現在、新しく指導される方を招く予定している。

学校における携帯電話の取り扱い等に関するガイドラインについては、校長会に内容を確認しており、今後通知を発出する予定。重大事態への対応についての整理では、昨年度、いじめ防止基本条例、基本方針の改定をした。これを踏まえて、重大事態が発生した場合の対応について整理していく。

臨時休校時の対応についての整理で、Jアラートへの対応などに関連して、一斉臨時休業決

定マニュアルの改定を行う。こども110番の見直しで、登録等の手続きの見直し、関連機関との情報共有の再確認を行うこととしている。

○千葉課長

社会教育関係の状況説明をする。1 学校教育の(3)地域資源を活かし共同愛を育む教育の実践について、コミュニティスクールは、士別市立の全部の学校に学校運営協議会が設置され、各学校、各地区で第1回目の協議会が開催されている。今年度は、上士別、多寄、温根別、市内において、市民の方4名が地域コーディネーターになっていただき、月に1度集まって情報交換や研修を行っており、そのほか道主催の社会教育関係の講座を受講している。また、各学校、各地区では昨年度も様々な活動を行っており、皆様のお手元の、令和6年度士別市総合教育会議社会教育課資料というのに写真も掲載させていただいているが、例えば、温根別地区では、陸上記録会に向けてのボールの投げ方指導を実施、多寄地区では学校と住民合同参加の1日防災学校、他にも学校支援サポーターの活動、上士別小学校の校外清掃、南地区の挨拶運動なども実施している。

次に、2 社会教育の、(1)子供たちの豊かな体験活動の推進と自主性を育む学びの充実について、地域の特色を生かした職業、文化、自然、歴史の体験を通してふるさとを思う心を育てる「士別ふるさと体験広場」では、昨年度のアンケート結果を参考に、今年はお花屋さん体験や民謡体験、米づくり体験などのプログラムを組んでいる。また、市長、教育長が子どもたちと夢や希望を語る「こども夢トーク」においては、今年度は南小学校、糸魚小学校、朝日中学校の3校の予定となっている。また、新たな形で実践を取り入れた「子ども議会〜チャレンジ応援事業〜」では、子ども議員7名に任命書が交付され、事業の企画運営には、まちづくり塾7期生が携わって現在進めている。

(2)青年層や高齢者の学びの充実について、学び舎「つくも」では、6月7日に78名登録でスタートして、北海道学、教養、くらしの3コースで、生成AIなど、時事問題や市内の中高生との交流や市外への視察研修などを予定している。

(3)幅広い世代の主体的な学習活動の促進について、社会教育課では、サークルメイトを冊子中心からウェブへと移行する準備をしており、市立士別図書館では、移転オープン20周年特別企画として、6月15日から7月14日まで「松井エイコ壁画の世界展」と「まっついのに絵本原画展」を開催し、6月30日には、士別まちづくり応援大使である、松井エイコさんのギャラリートークと、紙芝居の実演講座も開催する予定となっている。その他にも、図書館では高橋しんさんのイラスト原画展を行っているが、詳細は徳竹課長から説明する。

(4)地域文化の継承について、今年度、市の指定文化財である屯田兵屋の入口の庇の修繕とネズミ侵入防止対策工事を予定している。

(5)市民ボランティア活動の促進について、博物館ボランティアは年々減少しており、現在30名前後となっている。資料整理だけではなく、自然講座の手伝いなど活動の幅を広げており、今後においても活動が活発になるよう進めていきたい。図書館ボランティアは現在12名で、こちらは12名で数年推移しているということであった。図書館ボランティアの方々は、

本の整理だけではなくイベントでの活動もしており、随時図書館だよりで募集を行っている。

次に、4 文化芸術の振興、(1)市民の文化・芸術活動の促進について、あさひサンライズホール開館30周年記念事業では、今年度、様々なイベントの冠に30周年記念を付けて開催し、11月をめでに記念事業を開催する予定としている。皆様のお手元にお配りしている、博物館の版画の講座については、6月29日に版画家の府川誠さんを講師に、「版画で遊ぼう 足踏み版画体験教室」を予定している。

○徳竹課長

合宿の里スポーツ推進課より報告させていただく。重点の中にある、(1)市民皆スポーツの実現に向けた機会づくりについて、市民スポーツウィークを昨年から実施をして今年で2年目になる。市長からもお話のあったとおり、スポーツの日にあわせて昨年は10月に行ったが、このスポーツウィークをきっかけに市民の皆さんにいろんなスポーツに関わっていただくには、寒くなる時期に向かつての話なので、今年は6月15日土曜日から、オリンピックデーの6月23日、日曜日まで9日間という設定にしている。様々な団体から市民士別スポーツウィークの冠をつけて取り組みをしていただいております、それぞれの主催団体があるが、市民はどなたでも参加ができるということが、このスポーツウィークのプログラムでやっていく条件になっている。士別市民以外は受け付けないということではなく、最低でも士別市民はどなたでも、特にその主催団体の会員に入らなくても参加できるということで、2年目もやっていきたいと考えている。

また、(3)オリンピックムーブメントの普及は、北海道オールオリンピアンズと連携した「オリパラフェスティバル」を今年も6月23日に陸上競技場で開催する。今年も北海道オールオリンピアンズから参加をいただき、あいおいニッセイ同和損保からも、これまでパラリンピアンという形で来ていただいていたが、聴覚障害がある方だけは「パラリンピック」ではなくて別に「デフリンピック」というのがあって、その代表でもある、松本さんに参加をいただき、総勢6名のオリンピアン、デフリンピアンをお迎えして、陸上競技場で行う。また、参加していただくオリンピアンの中から、スピードスケートの鈴木さん、スノーボードの松本さん、アイスホッケーの藤本さんの3名が、翌日、24日月曜日に中学生を対象とした「オリンピアン教室」で、士別中学校、南中学校に午前、午後に分かれて実施をする。

(2)各種スポーツイベントの開催では、7月13日に、第3戦になる「ホクレンディスタンスチャレンジ」、翌週日曜日には、第37回「士別ハーフマラソン大会」を開催する。新聞でご覧になっていただけたかと思うが、増田明美さん、ゲストラナーとして富士加代子さん、今年から現役を終えられて母校順大のコーチになられた今井正人さんを迎え、この後、招待選手の多くは発表させていただければと思っているが、早急に地元出身、中央大学の2年生になる本間颯くんを招待し、同じく士別出身の小椋裕介くんについては、所属チームの事情や、目指している大会との兼ね合いもあって今年は参加できないため、地元出身凱旋レースとしては、本間颯くん1人になると思っている。

7月13日のホクレンディスタンスチャレンジも、ハーフマラソンも、1人でも多くの市民

の方々、そして士別の子どもたちに間近で見ていただき、今まで以上に興味を持っていただきたく、いろんな取り組みを考えてきている。ハーフマラソン大会は、図書館とも連携をしながら、高橋しんさんの原画展をやっており、これも市内外の方々に興味を持っていただきたいという形の一環でもある。当日、沿道に立つスタッフの方々には、全てこのイラストの入ったTシャツを着て従事をしていただく。あとひと月ぐらいであるが、さらにいろんな形でPRをしていければと思っている。

(5)合宿受け入れ態勢の拡充について、予約状況は、ゴールデンウィークスタートから毎年恒例の道内高校の女子バレーの合宿、陸上の合宿も1発目の日本郵政もスタートしているが、この後も大会等々も含めて、ほぼほぼ例年通りの感じで来ているということを報告する。

○渡辺市長

まず協議事項、士別まなびフォーカスからスポーツ課までの説明について、委員の皆様から不明な点、ご意見、質問等はないか。よろしいか。

(意見なしの声)

次に、(2)中学校教科用図書の採択について、説明を求める。

○岡田課長

令和6年度第6地区教科用図書採択教育委員会協議会実施計画について説明する。これまで、4月9日に第1回の図書採択教育委員会協議会を行い、その後、各市町村から調査委員の推薦をいただき、6月3日の第2回協議会において、調査委員の決定をしている。今月24日に第1回教科用図書調査委員会を開催し、7月1日、2日に第2回目の調査委員会、計3回で教科用図書についての調査を行っていただく。7月23日に第3回教科用図書採択協議会を開催し、この場で協議会としての意見をまとめる。8月中には士別市教育委員会として、教科用図書を採択するという流れになる。

○渡辺市長

(2)の説明について、質問などはあるか。よろしいか。

(意見なしの声)

次に、(3)市立小中学校適正配置計画について説明を求める。

○岡田課長

朝日地区における義務教育のあり方について、数年前から保護者と説明会を通じて協議を重ねてきており、5月13日に第1回保護者説明会、6月6日に地域の住民の方も合わせて第2回目の説明会を開催した。令和4年までの説明内容と現状として、朝日中学校の現状と課題について、校舎の老朽化によって耐震性が満たしていないということを説明している。令和4年まで保護者からは、朝日地区に義務教育学校として残してほしいという意見が多くあり、朝日中学校の2線校舎と糸魚小学校校舎を使うという提案をしてきている。しかし、児童生徒数の減少が予想以上にあるため、義務教育学校とする場合、現在の糸魚小学校の校舎の改修だけで足りるのではないかということで、意見として加えている。

次に、現状で想定しうる手立ての整理について、下の表では、朝日中学校を他の中学校に移

行する、編入する場合ということで示している。交通では、往復 1 時間のバス通学が必要になること、教職員の配置、生活環境、学習環境について示している。義務教育学校とした場合には、校舎は現在の糸魚小学校の校舎、交通は現状どおりの朝日地区内での通学になる。教職員数は、小学校、中学校合わせての義務教育学校になるため、教員の定数についても合計した数となる。生活環境は慣れ親しんだ環境での学びが受けられることや、学習環境においても、メリット、デメリットをそれぞれ挙げている。いずれも想定では、令和 8 年度から他の学校に編入か、義務教育学校になるということでお示ししている。3 ページ目では、他の学校へ編入の場合、朝日地区には小学校だけが残ることになるので、校長が 1 人、令和 8 年度は児童数 15 名で教員は教頭以下 6 名、校長と合わせて 7 名になる。義務教育学校の場合は、校長 1 人、小学校にあたる前期課程が教頭以下 6 名、中学校にあたる後期課程が教頭以下 11 名となる。今後、子どもの数が減れば教員の数も減ってくるが、義務教育学校にすることによって、両校合わせた教員数の確保ができるという説明をしている。

前回の 5 月 13 日の説明会後に保護者アンケートを実施しているが、回答数が少なめであったので、再度アンケートを行っている。1 回目では、義務教育学校という意見が多い中、他の学校にという意見もあった。今後、2 回目のアンケート結果も参考にし、地元の皆さまに対して丁寧な説明を行い協議していく。

○三上部長

温根別小学校に関する要望書について説明する。5 月 7 日に、温根別小の P T A 会長、温根別小学校の同窓会長、地域住民の代表の方から、今後の温根別小学校に関する要望所の提出を受けた。内容は、今後、温根別小学校に就学を予定している子どもたちの数が減ることから、今年の 2 月から保護者の方と協議を重ねてきており、その後、地域を交えた話し合いをされ、温根別小学校を統廃合の措置をしていただけるように要望するという要旨だった。その根拠としては、今後、子どもの数が減ることになると学級数が減り、学級数に基づく先生の数がどんどん減っていくといった形になる。

この後、温根別地区で生まれてくる子どもの数が少ないため、来年は入学者 0 人、その後 1 人ずつが続くが、その後は 0 人が続くという状況になる。そういった状況から、地域の中では苦渋の選択ということで、今回この統廃合についての要望書が上がってきている。この統廃合に関して、詳細な要望ということではありますが、統廃合されたとしても、学校に安心して居場所を作っていただきたい。そのためには、楽しく学校に通うための交流、連携、推進など、事前の準備をお願いしたいということ、子どもの通学が長くなるため、長距離通学を安全に行える支援をお願いしたいということであった。温根別小学校は、来年が開校 120 周年の節目を迎えるため、それも踏まえながら、120 周年の節目を迎えた令和 7 年度をもって統廃合を検討していただきたいとお聞きしている。

2 ページ目は、これまで学校で話し合われた内容で、2 月 5 日の P T A 役員会から 4 月 22 日の 120 周年記念組織会議を含めて、また、ゴールデンウィーク中には各自治会の方におろして、各地域でも話し合いをされていることをお聞きしている。

3 ページ目は、校長が作った資料で、温根別小学校の児童数の推移、1 番右には先生の数の推移になっている。児童数も令和 2 年の 12 人から令和 9 年には 8 人、先生の数も令和 2 年の 8 人から令和 9 年には 4 人になるといった部分がここに示されている。

これについては、今後、教育委員会会議の中で検討する、話し合いを行っていくということで、先ほど教育委員会会議の中でも確認したところ。

朝日地区の義務教育のあり方、またこの温根別地区の小学校の要望についても、今年、小中学校適正配置計画の中で進めていくような形になると思うので、よろしく願いたい。

○渡辺市長

朝日地区の義務教育のあり方と、温根別小学校からの要望書に関する情報を説明があった。皆さんから質問などはあるか。

○加藤委員

先ほどの教育委員会会議でも話はしたが、現状で朝日にしても温根別にしても、方向性は違うが、教育委員会のみでやっていける題材ではなく、行政として展開していかなければならないと思うので、市長にもぜひご協力いただきたい。もう 1 つ、朝日で令和 8 年の開校を目指すということだが、義務教育学校は、小中両方の教員免許が必要なのか。

○泉山教育長

本来、両方の免許をもっている先生がいればいいが、それは 1 年、2 年では難しい部分もあるので、数年かけての事となっていく。可能な限り免外申請をして教育活動に当たるということで、単年度ではなかなかそうはならない。

○加藤委員

そう考えると、もうあと 2 年ない状況になってきている。建物に関して言えば、今の糸魚小学校の部分的な改修だけで何とかかなりそうとのことだが、設計はまだしていないのか。それを含めて、令和 8 年の開校を目指して、義務教育学校に進めてほしいという保護者の考えはあるっていう感じなのか。令和 8 年で大丈夫なのか。

○渡辺市長

相当タイトだと思う。

○加藤委員

私もタイトなスケジュールだと思っている。今後スピード上げてやっていくしかない。僕らも協力をさせていただきたい。温根別小学校に関しては、保護者の皆様が地域の皆さんと共に出した答えが、こういう形になってきたということだが、閉校後の跡地利用は、教育委員会では決められないので、地域の方々の要望も含めて、市も一緒になってご協力いただきたいと思います。あと、子どもたちの安全な通学をお願いしたい。拠点校や部活動にも関わってくるが、交通網について、バス会社とかタクシー会社も存続してもらわないと難しいところはある。交通網に関してはお年寄りも全部関わってくることなので、それを含めてご協力いただきたい。

○渡辺市長

温根別小学校は耐震化になっているので、その後の使い方は市内でもいろいろと想定はして

いるが、地域の方とお話しながら進めていく形になる。公共交通は、中学校の部活動の地域移行に合わせるのと、習い事応援タクシーについても教育委員会も入って話をしていかなないと進まないと思うので、関係部署に指示を出してやっていきたい。

○山田委員

適正配置計画について、朝日地区と温根別地区、それぞれ違う議論になると思うが、教育委員会としても決めなければならないことがたくさんあるが、市長として、こういうところは大事にしていきたい、あるいはこういうところは整理していきたいみたいな話は何かあるのか。

○渡辺市長

直接、私が現地に入ることは少ないが、教育長や三上部長に私の考え方をお話している。私は、西小学校の閉校の時に保護者の立場でいて、一部の声が採用されてしまうというケースも自分自身経験している。少数ではあるが決めかねているという方や、社会に出た時に対応できるように育ってほしいという意見もある。単純に数字の問題ではなくて、地域のいろいろな意見があるということをみんなで揉んだ中で進めてほしいという思いがある。

地域の方にも今後のことを含めて、何が最良なのかっていうことは考えていただきたい。地域としてこうあるべきだっていうことを考えてほしいとお願いしている。

○山田委員

温根別小学校の協議で、10回ぐらい話し合ったということだが、参加者を見ると、それほど広くという意見でもなさそうだ。地域全体として見た時にどうあるかっていうのは、かなり慎重であるべきだと思う。少しでもいい環境の中で子どもたちを育てたいと誰しも思うことだし、そういうのを優先するべきという話にもなると思う。一旦なくしてしまったら、元に戻すことはかなり難しいと思うので、慎重な取り扱い方っていうのを事前に示しながらやっていかなければならない。温根別も朝日も、果たしてそのスケジュールで間違いないのかが気になるところで、非常に心配に思っている。

○渡辺市長

スケジュールは遅いぐらいだと思っている。8年度に目指すという現状で考えると、8年度からその学校ができた状態になっていなければならないので、7年度にある程度修繕しなければならない。そうすると、今年の秋には予算化しないと7年度予算に間に合わないので、相当厳しいだろうと思っている。

○山田委員

ソフト面ではどうか。学校の名前だとか、校章、校歌など色んなものがある。そういうソフト面はどうか。

○泉山教育長

全道の義務教育学校にお話を聞いた。色々やることはあるが、開校のときになくてはならないのは「教育目標」。学校の名前は「義務教育学校」にしなくてもいい。地域で応募してもいいし、決まりはない。教育目標は、両校の今までの教育目標を合わせて作る。開校の時に全部揃っているのいいが、新しい学校制度なので、子どもの意見を取り上げながら、例えば1学

期、2学期に校歌を作っている学校もある。まずは学校名と、教育目標が大事だと思う。資料には令和8年からの編入を想定して協議と書いている。地域では8年を想定した場合という風に出している。私は地域の方々のご意見を伺った上で、走りながら揃えていきたいなっているところがある。

○馬場代理

新聞報道を見ると、義務教育学校を希望する保護者の方が多いということだが、今後、何回か説明会を重ねていくうちに気が変わると言うか、別の中学校へ通わせるっていう意見に変わる保護者や地域の方が増えて、数字が逆転した時にはどうなるのかと考えてしまう。

○泉山教育長

確かに、そういう風になっちゃったときには、熟議を重ねていく中で対応していきたいと思う。

○多田委員

温根別小学校が閉校となれば、子どもたちは市内の小学校に通学することになると思う。

私の家は学田地区で、タクシーが家の前まで迎えに来て、1軒1軒回ってもらい学校に行っている。温根別地区はさらに奥の方になるので、単純にバスと違ってという風に考えるのではなく、やっぱり安全面とかも考えて検討していただきたい。

○渡辺市長

学田地区はもともと西小学校の校区で、なぜ1軒1軒回っているかというと、スクールバスのなごりがあるって、家の方までという地域の要望があるって今に至っている。温根別地区の場合は、非常に広い範囲から小学校に来ている現状があるので、1台のタクシーで回った時に、最初に乗った子と最後に乗った子で15分もかかってしまうとすると、現実的じゃないことも想定されるし、その辺は地域の方との協議になると思う。例えば、今の小学校のある場所をターミナルみたいにして、そこまで来ていただく方式とか、色々な考え方が地域の方から出る気がするんで、地域の希望に沿ったような形となるよう協議できればと思う。

○多田委員

子どもたちは、小規模校から人数が多いクラスに行くっていうことになる。私の子どもも西小学校の1学年1クラスから2クラスの配置になって、5、6人ずつ分かれてクラスに入って、友達と別のクラスになった。そうしたら慣れるのに時間がかかって、結局、保健室通いたいになってしまい、慣れるまでに半年ぐらいかかったという話を聞いた。親は大きい小学校でたくさんいたほうが友達もできるんじゃないかという風に思いがちだが、本人は慣れない環境があって、そういうところは先生含め、大人たちも考えていってあげたらいいと思う。

○渡辺市長

地域の方からいろんな意見が出るが、親目線の意見と子ども目線の意見は違うので、学校は基本的にその子どもを見る、教育する施設なので、子どもたちにはこういう形がいいっていうことで議論できるのが1番だと思っている。教育委員会から情報提供とかできるような進め方をしていきたいと思う。私も西小から土別中学校に行きましたが、当時、西小学校から同じ

クラスだったのは3人ぐらいで、なれるまでに数ヶ月かかった。子どもさんも苦勞されるし、全てにおいて良し悪しはあるかもしれない、得手不得手もあるかもしれないが、環境の変化に慣れるっていうのは学びの1つでもあると思う。あんまり全て悲觀的に考えないで、できれば子どもたちに前向きにアドバイスできる環境も必要だと思う。

○加藤委員

「就学予定の子どもが減ることから、現在、在籍児童の保護者による協議を踏まえ、温根別住民一同の合意のもと」と書いてあるが、これ以外にも話し合いはしているのか。

○三上部長

ゴールデンウィークに各自治会の会議で話し合いをしている。

○加藤委員

それまではこの会議のメンバーでやっていて、ゴールデンウィークの時に取りまとめをしたということか。

○渡辺市長

それが終わり、5月7日付けで教育委員会に要望書が来ている。

○加藤委員

さっきの話でいくと、本当にそれで大丈夫なのかっていうのも考えていかないと。合意ということで要望書が出てきてはいると思うが。

○渡辺市長

これまでも温根別地区は、自治会含めて協議が取れている地域なので、2月からの会議の段階で、自治会には協議を進めているということ saying ではないかと思う。おそらく自治会の方も、これからの学校に関わる若い人たちの意見をまとめて、こういう形で決まったと報告したのだと思う。

○馬場代理

名前が上がっている保護者の皆さんも自治会の会員でもあるわけだから、そういった意味で通じているのだろうと思う。

○山田委員

市長も言ったとおり、親の意見の方が強いんだと思う。自治会会議にしても、こういうものについても、やっぱり親目線、子どもをどう教育するのか、どういう環境がいいのかということで、どうしてもそっちの方が多い。もう少し幅広く意見を聞かなければならないと思う。

○渡辺市長

現段階で朝日と違うのは、朝日の方は保護者とか保育園に通われている、これから学校に関わる大人であって、温根別は自治会長さんとか地域の方が入っているので、そこは朝日との違いかなと思う。今後、自治会関係とはどうするのか。

○三上部長

適正配置計画の前回の計画で見ると、街中については地区を分けて、それぞれの地域住民に話を聞くことになる。周辺についても地区ごとの話の聞き方になる。今回の温根別に照らし合

わせると、要望書が来ているだけなので、それについて地域の方に話は聞いていかなければならないと思っている。そういった流れが1番正しい進め方と思っている。

○渡辺市長

朝日の自治会連絡協議会と意見交換とかしてもらおう形をとってはどうか。

○山田委員

誰が話して、誰がそういうところに導いた、というのはあんまり見えてないのだと思う。学校ではそういう話をしていて、先日もサンライズホールで説明会をしているが、自治会が主体となった意見交換はまだない。

○馬場代理

学校や地域住民の方からこういった要望書が上がってくる、多寄中学校の時もそうだが、そういうパターンと、西小のようにこちらから閉校を検討するっていうことで何度も説明をしてそうなるっていうパターンと、どちらか2つかなと思う。温根別は、地域住民から要望書が上がってきて、朝日は初めての義務教育学校、それにまつわることで、知らないことだらけっていうか、色々話し合いをしてご理解いただいた方がいいなと思う。

○渡辺市長

当時、西小学校の時は110人ぐらいいたが、閉校ということで市から説明されたのは、耐震化のことがあって、南小学校の工事で想定以上にお金がかかり、西小学校はさらに古いので、工事を行うのは現実的じゃないっていう説明があった。なるべく地域の意見を聞くとのことで、保護者や地域の方からバスを回してほしいという要望があった。閉校になったのは平成24年頃だったと思うが、今となったら、士別小学校も南小学校も団体競技をやろうと思っても人が足りないってなっている。10年で。だから直近の2、3年だけとか、自分の子どもがいるときだけと考えて決めてしまうと、残った10年後の保護者の方が困ることも考えられるので、その意見を大事に聞くことが必要だと思う。

○渡辺市長

他に意見はあるか。次に進んでよろしいか。

(意見なしの声)

次に、(4)中学校部活動の検討について、説明を求める。

○岡田課長

中学校部活動の拠点校方式については、要綱で定めて行っているが、現在の要綱では不具合があるため、見直しを行うというもの。背景としては、現在、士別中学校には卓球部がないため、南中の卓球部へ参加したいと生徒の保護者から話があり、南中側もこの生徒を受け入れたいという思いがあるということがあった。要綱では、平成30年度以降に廃部となった部活動を拠点校部活動の対象としているため、この卓球部については対象にならないという課題があった。そこで、要項の改正を行い、卓球部を拠点校方式の対象としたいというもの。

見直しの内容は、平成30年度以降に廃部となった部活動という要件を削除し、活動に関する規定の整理として、拠点校部活動は拠点校の顧問等の指導のもとで実施されることを明文

化、また、在籍校の関わりを明文化するというものである。拠点校方式は、現在、士中と南中に限定しているもので、今回は卓球部の対応のための改正であるが、今後、他の部活動でも同じようなケースとなった場合については、その都度見直しを行い、より良いものになるようにしていきたいと考えている。

○渡辺市長

士別市では卓球に関して少年団があり、小学校から卓球をやっている子はいる。その子が、士中に行った時には部活動はないということがあるので、説明のとおり、平成30年度以降の廃部という要件を撤廃した方がいいだろうというもの。

部活動の地域移行は8年度いっぱいだったか。

○三上部長

方針としては令和7年度末までに、ある程度の方向性を出すことになっている。

○渡辺市長

今、中学校の部活動も変わり目というか、過渡期というか、そういう状況であるので、こういったご意見とか色々出てくると思う。そういうのを取りまとめしながら、最良の方法を見出していきたいと思っている。これについて何かご意見はあるか。

○加藤委員

今回の卓球で、士中から2名が南中まで行くことを考えると、夏場はいいけれども、冬場の交通のこともどうするのか。今、卓球だけじゃなくて、吹奏楽は南中がすごく小規模になってきている。今回、平成30年度以降に廃部というのは撤廃されたが、子どもたちにしてみたら、他にもやってみたいことって多分あると思う。結局、子どもたちが卓球したいっていう思いだろうけれども、そういう意見が保護者からもあったのか。

○三上部長

中学校に上がる前に保護者からも聞いていた話ではあった。

○加藤委員

子どもがやりたいって言うことをやらせてあげられる教育環境が、子どもたちが取捨選択をできるようにしてあげれば、色々変わってくると思う。さっきの学校の話にもあったが、結局、子どもがどうしたらいいかっていうのが全てだと思うので、それを考えると、今回の卓球に関しても、他のものにも波及していく部分もあって、働き方改革だとかっていうのもあると思うが、形的にはそういう風にしていく中で、こっちも急務だと思う。交通の関係だとか、多田委員も教育委員会議とかで、習い事タクシーのことも言われていたが、保護者が送り迎えできればいいが、夫婦で働いていたら抜け出して送っていくことができないとか、迎えに行くこともできないことも考えると、バックアップしていけるような環境を整えていただければなって思っているんで、それも含めてよろしくお願ひしたい。

○山田委員

先ほどの説明だと、これから出てくるものに関して色々対応していきますっていう答えだったと思うが、部活動っていうものをどういう風に捉えるのがいいのかっていうとこだが、教育

的に考えればいいのか、それとも競技性として考えるのか。中学校ぐらいだったらもう競技なのか。それとも教育っていうところも、まだ入れておくという話なのか。

○渡辺市長

今まで文科省がやってきた部活動っていうのは、学校教育の一環なので、地域移行になっても、そこは変わらないと思う。

○山田委員

そもそも、国はどのスタンスでやっていこうとしているのか、競技なら競技でいいと思う。陸上にしても野球してもそうだが、スポーツっていうものの意味が、どういう捉え方で社会は抑えていくべきなのかって話になれば、こういう地域移行を自治体に持ってきて、国としてのスタンスと現状と、だんだんマッチングしていかないような気がする。

○渡辺市長

もともと文科省はずっとそれできていて、それに付随している中学校体育連盟は、あくまでもそれを補完するために地区大会、都道府県大会、全国大会をやって、そして心身ともに健康になってということやってきた。それが、拠点校の前に合同チームの時は、最初はダメだっけなり、サッカーはクラブ化したけど、当然出る権利がなかった。今回は国の方針が変わって地域移行になりますってなったら、個人的には、中学校体育連盟という組織のあり方も考えた方がいいのではないかと思った。

○山田委員

結局、ウェルビーイングって、こう言葉だけがどうしても先に来て、何のためのウェルビーイングなんだっていうところがある。やっぱりそこに重きを置いてやっていかなきゃならないなら、もう少し何か考えつかないのかなと思う。

○渡辺市長

現行の制度上、教育委員会所管なので中心になって動いてもらっていて、8年度から形を作るために、ちょっと時間も短いけどやらなくてはならない。この先、制度は変わってくるかもしれないし、多分やれない町がいっぱい出てくると思う。人材のことや財源のことなど、小さい町ほどハンディキャップがある。本来どこの町にいても最低限、子どもたちには同じ権利というか与えるべきで、勉強と一緒にスポーツもできるということを考えなければならない。

○山田委員

このままでいけば、お金のない家はスポーツができない。お金を持っている人しかスポーツしないって話になる。例えば、チアリーディングは剣淵まで通っている。それはやっぱり親の経済力で送り迎えしている。どんなスポーツでもそうなるかもしれない。

○渡辺市長

山田委員がおっしゃるように、位置付けというのはすごく大事だと思う。位置付けによってはその考え方や組み立て方が変わる。

○泉山教育長

今度の学習指導要領、10年に1回の審議が始まったけど、部活動をどういう表記にするの

か。市長が言ったように、教育活動の一環であるので、それをどういう表記にするのか。この部活動の地域移行で、そこが抜本的に変わるのか、それは残るのかによって変わってくる。

○加藤委員

子どものための部活動ではないのかって思ってしまう。

○山田委員

そうになったら、人間の生き方、社会そのものに気概があるっていうところに、気概をスポーツに持ったり音楽に持ったり、ダンスとか芸術に持ったりするわけだから。そういう方に全体的にシフトしていかなきゃいけないけど、実際、成り立たないっていうように思う。

○渡辺市長

文科省が学校教育だって言っている以上、我々行政としてはその位置付けで考えなければならぬ。ただ、おかしいなと思ったら、そういう自治体が増えれば要望も上がるだろうし、制度が変わるかもしれない。今の現況で言うと学校教育ということだから。それで、本当に外部指導者にお任せして、教員であり顧問である先生と、部員である生徒との信頼関係って成り立つのか、1番大事なその学校教育で、そこが全く触れられていない。

○山田委員

それで、ちょっと間違えると、いわゆるSNSでやられたりする。あそこの町はこうだとか、その学校はどうだとか、どこの先生はどうだってなっちゃう。非常にこういうような微妙な、そこを気をつけなくてははいけない。

○加藤委員

部活動指導員とか顧問の問題とかも、学校の先生にアンケートをとっているのだろうか。何年前かに聞いたが、子どもたちのために一生懸命やるのもいいけど、やっぱり自分の時間を突き詰めて、身を削ってまでやるんだったら、できれば残業代が出ればという先生も多いらしい。結局、学校に携わって、部活にも携わっている先生方と信頼関係は全然違う。部活を一生懸命やっている先生とその生徒を見ていたら、繋がりが強いなって思う。信頼してくれている人が指導してくれるのと、ただ単に塾のように勉強教えてくれる人を信頼できるの、どちらなのかっていう。色んな面でちょっと疑問を感じてしまう。

○渡辺市長

ただ一方では、教員の働き方改革という部分で言うと、部活動はもちろん学校教育の一環だが、メインってやっぱり児童生徒との対話をする時間だと思う。今それがままならないのも事実で、例えば、いじめの問題とか、そういう内面的な部分というのは、全部書類に残したりするその仕事が大変で、それで部活動ってなったら、しかも無報酬かってなるのもわかる。学校教育であるなら、なんで給料発生しないのと言われても、確かにその通りだと思う。

○泉山教育長

働き方改革で言えば、中学校の先生の1番の負担感は、部活動の率が多い。それ以外にも、テストの採点とか、保護者対応とか、色々な理由がある。今回の地域移行は全て、働き方改革だけじゃないが1つの要素にもなっている。加藤委員がおっしゃったように、部活をやりたい

って言う先生はいっぱいいる。地域移行になったとしても、土日以外でも、私はやりたいって言う先生が、手挙げてそっちに移行すると思っている。その時は、受け皿をどうするかとか移動とか、その辺をクリアしなければならないので、まずは今の外部指導者の財産を少しずつ膨らまして、土日の大会引率とか、そういった負担感をちょっとでもなくしていくところから始めていく。拠点方式とか合同チームっていうのは、地域移行のステップの1つであるから、そういったことで考えていければと思う。

○渡辺市長

それでは、4.その他について、皆さんから何かあればいただきたいが、よろしいか。

皆さんから多くのご意見をいただいた。今年度、課題もまだまだあるので、しっかりと皆さんからのご意見を聞きながら、最良の方向で事業を進められるように推進していきたいと思うので、今後ともよろしくお願いしたい。

【 会 議 終 了 】